

`Twist' in Dahl's Short Stories

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1996-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武藤, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4223

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ダールの短編の〈ひねり〉について

武 藤 哲 郎

At disconcertingly long intervals, the *compleat* short-story writer comes along who knows how to blend and season four notable talents: an antic imagination, an eye for the anecdotal predicament with a twist at the end, a savage sense of humor suitable for stabbing or cutting, and an economical, precise writing style. No worshipper of Chekhov, he. You'll find him marching with solid plotters like Saki and O. Henry, Maupassant and Maugham The reader looking for sweetness, light, and subtle chracterization will have to try another address. Tension is his business; give him a surprise denouement, and he'll give you a story leading up to it. His name in this instance is Roald Dahl.¹⁾

ロウアール・ダールは1953年秋、アメリカで短編集『あなたに似た人』(*Someone Like You*)を出版している。上の引用は『ニューヨーク・タイムズ』の書評で、彼の特徴を端的にとらえている。奇抜な想像力、意外な結末、毒のあるユーモア、そして簡潔な文体。それらが相まってダール特有の、あの残酷でうすら寒くも透明な世界を形成している。しかし、何と言っても彼の魅力は意外な〈オチ〉にあるであろう。洒落れた、切れ味の鋭いオチは読者をつかんでなさない。だからダールは、オチのほとんどないチェーホフを師と仰がず、O. ヘンリやモームとともに、かたくなにプロットに固執した。彼はモームと同じように、小説の究極の目的は読者を〈楽しませること〉にあると信じていた。ダールの短編をジェームズ・ケリーはいみじくもバドミントンの試合にたとえている。²⁾素早い打ち合いになると羽根が見えなくなるように、素早い筋の運びで、彼の物語の結末は全く見当がつかない。上の引用では‘twist’がオチにあると言っている。日本語にすれば〈ひねり〉であろうが、それがあるからこそ結末の予測がつかないのでであろう。ダール特有のオチを成り立たせている〈ひねり〉とは具体的にどのようなものなの

か。そしてそれはダールの文学性とどう関わっているのだろうか。

1. 二つのオチ

ロンドンのとある古本屋の奥の事務所で、主人のバゲッジ氏と秘書のトトル嬢が何やらうさん臭い仕事をしている場面から始まる「古本屋」(‘The Bookseller’)は1987年に『プレーボーイ』に発表されたものである。この短編においてオチはどのように落ちているかまず詳しくみてみたい。彼らのもとには毎日小切手を送られてきて、その二、三日分の合計は表の店で古本を売って得る一年分の金額をはるかに越えていた。トトル嬢は届けられた小切手を大手の銀行の支店に分散してある88の口座に振り分け、その預金高は200万ポンド近くにもなっている。バゲッジ氏は『ロンドン・タイムズ』などの新聞を机の上にのせ、時々『紳士録』を開きながら何やらメモを取っている。表向きに古本を売ることの裏で、彼らは一体何をしているのか。まずこの疑問(?)が読者の心に浮かぶ。しかし、ダールは容易にその答えは明かさない。バゲッジ氏とトトル嬢は保養先の北アフリカのモロッコで〈手紙〉を書き始める。宛先は新聞の死亡覧に載っていたサー・エドワード・レイシュマンの未亡人である。レイシュマン氏はエアロダイナミクス社の会長で、趣味は釣り、所属するクラブはホワイト・クラブであった。トトル嬢は慣れた手つきでタイプライターを次のように打っていった。「ウィリアム・バゲッジー古本屋より。親愛なるレイシュマン夫人へ。ご主人がお亡くなりになられた時に、このような手紙を差し上げて申し訳ございません。私どもはご主人さまに長い間大変ごひいきにしておりました。しかし、以下の本に関しましてはご主人が亡くなられる前に注文を頂き、すでにならぬようにホワイト・クラブ気付けでお送り申し上げましたが代金が未納になっております。ご安心ください。手前どもは秘密厳守で仕事を行っております。小切手が届きましたら、もうこちらからご連絡することはございません」とあり、その本のリストが手紙の最後に記されてあった。

THE COMPLEAT ANGLER, Isaak Walton, First Edition.

Good clean copy. Some rubbing of edges. Rare.

£420

LOVE IN FURS, Leopold von Sacher-Masoch, 1920 edition

Slip cover.	75
SEXUAL SECRETS, Translation from Danish.	40
HOW TO PLEASE YOUNG GIRLS WHEN YOU ARE OVER SIXTY, Illustrations. Private printing from Paris.	95
..... ³⁾	

『釣魚大全』の初版本はレイシュマン氏の趣味が釣りであるからわかるが、『毛皮のヴィーナス』、『性の秘密』そして『60を過ぎていかに若い娘を喜ばせるか』を目にした読者は一瞬何のことかと考えるが、ここで初めて読者の疑問(?)が解ける。好色本をさも亡くなった主人が注文したように見せかけて、その未亡人からお金を巻き上げていたのである。ダールはここまで、周辺のディーテイルは語りながらも肝心の仕事の内容は明かしてこなかった。読者を意識的にタンタライズして疑問(?)を大きくふくれあがらせてきた。そして物語の結末近くにくいて、送り状のリストによってその答えを読者に悟らせている。つまり、これは一つの〈オチ〉である。

さて、彼らの巧妙な犯罪は警察の知るところとなるのだろうか。新たな疑問(?)が浮かぶ。バゲッジ氏とトル嬢が北アフリカでの休暇を終えてロンドンに帰ってきてから一か月ほどしたある雨の日、事務所に一人の若者とその母親が入ってきた。母親はバゲッジ氏に本の送り状を見せて「亡くなった主人がこのような本を注文するはずはありません。何かの間違いではないですか」と詰め寄った。彼は「男ってものはみんなそんなものですよ。ちょっと息抜きがしたくなったんですよ。別にとがめることはないじゃないですか、ねえ奥さん」と言って、その場をうまく逃れたと思った。

The woman stood very straight and still, and she was looking Mr Buggage directly in the eyes. 'These curious books you list on your invoice,' she said, 'do they print in Braille?'

'In what?'

'In Braille.'

'I don't know what you talking about, madam.'

'I thought you wouldn't,' she said. 'That's the only way my husband could have read them. He lost his sight in the last war, in the Battle of Alamein more than forty years ago, and he was blind for ever after.'

The office became suddenly very quiet.⁴⁾

バゲッジ氏は何とか未亡人を言いくるめることができたと思った。しかし、思わぬところに落とし穴があったのである。亡くなった男はアラメインの戦いで視力を失い、以来40年間盲目であった。点字以外に本を読む術はない。勿論、好色本は点字で印刷されてはいない。その後、表の店で彼らの会話を聞いていた二人の刑事が中に入ってきて、バゲッジ氏とトトル嬢は警察に連れていかれる。これが物語の結末である。それは上の引用の‘In Braille’の箇所を読んだとき、彼らの破滅を知って読者の疑問(?)は解ける。つまり、ここにも〈オチ〉がある。「古本屋」には二つのオチが存在することになる。

2. 〈ひねり〉の構造

「古本屋」には二つのオチが存在していたが、他の作品はどであろうか。1977年にイギリスで発表された「ヒッチハイカー」(‘The Hitchhiker’)にも実は二つのオチがある。BMWに乗りこんできたヒッチハイカーは素性がしばらくわからない。しかし主人公の身につけていた革バンドを取り出して見せたときに、彼が〈すり〉であることが判明する。これが一つのオチで、さらに彼が警官の持っていた手帳を取り出して見せることによって、主人公は裁判所に出頭しなくてもよいことになる。これがもう一つのオチである。1960年に発表された短編集『キス、キス』(Kiss, Kiss)の「ウィリアムとメアリー」(‘William and Mary’)ではどうであろうか。死んだはずの夫ウィリアムからメアリーは手紙を受け取る。夫が目と脳だけになって生きているのを知るのが一つ目のオチであり、彼女がその目に生前夫が嫌っていたタバコの煙を吹きかけて、これからいじめようとするのが二つ目のオチである。このように見てくると、ダールの短編、特に後期の作品において、基本的に二つのオチが存在すると言える。

次にこの二つオチの関係を詳しく見てみたい。「古本屋」であるが、一つ目のオチによって読者はバゲッジ氏とトトル嬢の犯罪の巧妙さに驚く。彼らはけして1,000ポンド以上は未亡人にたちに要求しなかった。それぐらいなら、葬式で気も動転しているので、さっさと払った方が後で変な噂が立つよりもいいと彼女たちは思う。第一、トトル嬢は警察が調べにくることを想定

して正式な帳簿はつけず、「小学校時代の算数」と題したノートに数字だけを記入しているという念のいれ方である。だから、読者は一つ目のオチのあと、彼らは、ひょっとして警察には捕まらないのではないかと思う。予想がある一つの方角へ動き出すわけである。ところが、二つ目のオチによってノースコート夫人の夫が盲目であったことが知れると、その予想がぐっと別の方角へ曲がってしまう結果となる。これが〈ひねり〉である。「ウィリアムとメアリー」の場合、一つ目のオチで死んだはずの夫が生きていることを知ったメアリーは、また何かと口うるさい夫の指図に従うことを考えると気持ちが悪くなる。ところが、二つ目のオチでは、よくよく夫の姿を見て今度は私がいじめる番だと思い、目にいきおいよくタバコの煙を吹きかける。ここでの〈ひねり〉は、立場が逆転するのでその度合いがかなり強い。「ヒッチハイカー」はどうなっているだろうか。スリであることが一つ目のオチで判明するわけだが、彼は自らを〈指職人（‘fingersmith’）〉と呼ぶ変わり者で、善人からは何も盗らないことを信条にしている。つまり、主人公はヒッチハイカーを嫌っているわけではない。二つ目のオチで警官の手帳を取り出して見せるが、これはスピード違反をさせてしまった償いのようにも見える。これは二つのオチに〈方向〉の差がなく、〈ひねり〉の度合いが少ないさらったとした、ダールのあの洒落たオチに属するものである。

次に〈間隔〉である。これは一つ目のオチと二つ目のオチとの距離間隔である。〈方向〉が違う二つのオチをごく近いところに配置すれば〈ひねり〉の度合いは極端に強くなる。たとえばダールの70歳の誕生日を記念して1986年に出版された *Two Fables* に収められている短編「王女マメーリア」（‘Princess Mammalia’）がよい例である。王女マメーリアは自分の美しさに魅了されないその国でただ一人の男、つまり自分の父親である王様を殺そうとする。問題はその方法で、ある夜白髪に白い髭をはやし杖をついた老人から、牡蠣を一日土の中に入れてその汁を一滴ずつ生の牡蠣にたらせば、牡蠣に当たったと思われ証拠が残らないと教わる。彼女の18歳の誕生日に食卓に牡蠣が並べられ、彼女は老人に教えられた通りにした。そのあと、王様が食卓の準備が滞りなく整っているか見に来るわけだが、彼は自分の牡蠣の方が娘のより大きいのを見て、執事に取り替えるように命じる。これが一つ目のオチで、読者は父親の優しさが彼を結局救うことになるという運命の皮肉を感じる。ところがそのすぐあと（行数にすれば10行も離れていない）、マ

メーリアが体を硬直させて死んだ後、王様はクローゼットから長い白いつけ髭とかつらそして杖を取り出して、喪中で仮装舞踏会も開けないだろうから燃やしてしまえと執事に命じる。これが二つ目のオチで、王女マメーリアは運命の皮肉で死んだのではなく、自分が殺されることを知っていた父親に無慈悲にも殺されたのである。このように二つのオチの〈方向〉が異なり、その〈間隔〉がほとんどない場合、あのダール特有の毒のある〈切れ味の鋭いオチ〉となる。ダールの短編には基本的に二つのオチがあり、その存在によって〈ひねり〉が生まれる構造となる。さらに、その二つのオチの〈方向〉と〈間隔〉を微妙に調整することによって、ダールは〈ひねり〉に異なる味をだしている。これが〈ひねり〉の構造である。

3. プロットと文学性

この小論の最初に上げた引用の中に「さらっとした性格造形を望むなら他の作家にしなさい」とあるように、ダールの短編を読んでいて奇妙に思うことの一つに、性格描写がほとんどないことが上げられる。バゲツジ氏にしてもトル嬢にしても容姿の描写はかなりあって下品な人物であることはわかるが、彼らの人間性が今一つ生き生きと伝わってこない。この最大の原因は、心理描写がないことにつきるであろう。人間の心の内面を描くことは性格の肉付けに必要であるばかりでなく、作者のモラル（哲学）を伝える手段としても欠かせないものである。反対に、チャーホフは「中二階にある家」にしても「犬を連れた奥さん」にしてもかなり心理描写が多い。極端な言い方をすれば、その時の気分や印象を描いただけといっても過言ではない。こう考えてくると、短編小説には二種類あるようである。一つはダールのように、時と場所と人物が設定されていて、物語の始めと終わりがはっきりしているもの。もう一つはチャーホフに代表されるような、どこで始まってどこで終わったのかわからないような、人生の一断面を描いたもの。どれが短編小説のあるべき姿かはもとより決められるべき問題ではない。要は、スペースが限られている短編小説なので作家がどちらを取るかである。どちらが自分の能力に適しているかである。しかし、文学性を言葉による人間性探求と定義するなら、それは後者の方にあるであろう。高い文学性と意外なオチとは、なかなか結びつかないものである。逆に言えば、意外な結末がある作品は文

学性が低いと見なされがちである。アラン・ウォレンが「ダールを正当に評価しない障害は、多くの批評家たちのプロットと物語構成にたいする冷淡さであり、時としてそれはあからさまな敵意である」⁵⁾と述べているのは頷ける。

ダールは作家になりたての頃、ヘミングウェイを模範にした。後にある程度有名になった頃、最初の短編集『汝の頭上に』(*Over to You*)をこの大作家に見せたところ、「私にはよくわからない」という答えが返ってきたそうである。理由はあとで触れることにして、ヘミングウェイの短編に「雨の中の猫」(‘Cat in the Rain’)という作品がある。作者の意図は、倦怠した夫婦生活に新たな意味を見いだそうとする若い妻の心の微妙な動きを、瞬時に固定することであった。彼女のけなげな心が、雨の中にうずくまっている子猫に重なり、その痛々しさがひととき雨の描写によって際だってくる。ベーカーによれば、この作品は1923年にイタリアの北西部の海港ラバルロに滞在したヘミングウェイ夫妻の身边に起こった些細な出来事が素材になっているらしい。その時、雨が降っていたかどうか定かでないが、あの雨の描写の克明さは実際に自分の目で見なければ描ききれないものである。人生の一断面を永遠のものとするなら、自分で見たり感じたりしたディーテイルがどうしても必要になってくる。話を『汝の頭上に』に戻すと、この短編集はダールの戦時中の体験を反映したものが多く、中には「カティナ」(‘Katina’)のように戦争の悲惨さを訴えたノンフィクションに近い秀作がある。しかし、そのほとんどが人生の一断面をとらえたものか、オチを重視したストーリーなのか判別がつかない。中途半端で、焦点がぼけていたからヘミングウェイのあの答が返ってきたのであろう。ところが、ダールは今度は焦点をプロットだけに絞って、この小論の最初に取り上げた『あなたに似た人』の成功を収めた。

Nonfiction, which means writing about things that have actually taken place, doesn't interest me. I enjoy least of all writing about my own experiences. . . . For me, the pleasure of writing comes with inventing stories.⁶⁾

ダールにとっての書く喜びは〈物語を作る〉ことであった。C. S. フォレス

ターに頼まれたのに、メモでなく自分でストーリーを書いたのも、毎晩子供たちに即興で物語を語って聞かせたのも、人生の一断面を克明に描くよりも物語を作ることの方に彼が向いていた証拠であろう。確かに「ダールは抽象的思考を好まなかった」作家である。⁷⁾ 第二次大戦中、同じ地中海の空を飛んだサン・テグジュベリとは、同じ経験をしながら書いた作品は『夜間飛行』を例にとってもかなり対照的である。だからといって彼にモラル（哲学）がなかったとは言い切れない。ダールにとって書くことは人間性探求の手段ではなく、あくまでも人に喜びを与える手段であった。そこが大きな違いであろう。だから、彼は作家の主要な資質のいちばん最初に〈想像力〉を上げている。

ダールがインタビューで記者に、理想の人間性や彼の作品の意味を尋ねられたとき、わざとその問題を避けたそうである。彼によれば、自分の作品を分析するのは批評家や学者の仕事であって、自分の仕事はただ読者を楽しませるだけだと語っている。⁸⁾ 〈ぐんでん返し〉で有名なモームでさえ少なくとも「赤毛」では『人間の絆』に見る愛の無意味さが主張されていたし、O.ヘンリにしても人間の温かみを信じる姿勢が窺えた。しかし、ダールにはそのような主張があまり窺えない。特に彼の後期の短編には、価値観や信念、つまりモラルがほとんどない。彼のモラルはどこに行ってしまったのだろうか。

ダールはアメリカでは作家としてよりも、あのアカデミー賞を授賞した女優のパトリシア・ニール（Patricia Neal）の夫として有名だったらしい。しかし、彼らの幸福な結婚生活も、息子セオの交通事故、娘オリピアの死、そしてパット自身の発作と次々に悲劇が襲う。茫然自失状態のダールがこの悲劇の合間に力を奮い立たせて書いたのが、童話であった。セオの事故の後、彼はベッドで子供たちに語っていた物語を『ジェイムズと大きな桃』（*James and Giant Peach*）にまとめ、オリピアの死の後、記録的な売れ行きを示した『チャーリーとチョコレート工場』（*Charlie and the Chocolate Factory*）を出版している。この作品では、貧しくても正直者のチャーリーが物語の最後でウォンカの工場の後継者になるというモラルがある。さらに、言葉を教える大切さから、時代に先んじてテレビの子供に与える悪影響も主張している。短編「ウィリアムとメアリー」で彼らに子供がいなかったことにどれだけの読者が気付いていただろうか。さらに、夫婦間の亀裂を扱った

ダールの短編は多いが、必ずといっていいほど彼らの間に子供がいなかったことを憶えている読者はほとんどいない。ダールはこよなく子供を愛した人間である。つまり、ダールのモラルは、後期の短編では消えるが、その代わりに童話に出てくるようになったと考えられる。大人向けと子供向けのどちらが書くのにむずかしいかの問いに、ダールは子供の方がむずかしいと答えている。⁹⁾ 何故なら、子供は大人の集中力は持たず、最初のページで子供たちを引きつけられなければ、彼らはすぐに本から離れてテレビを見てしまうからである。ダールは初めて自分のモラルが受け入れられる対象を見いだしたのであろう。さらに、彼は「小説家には二つの面がある。一つは人と変わりのないことをし、人と変わりのない言葉をしゃべる普通の面。もう一つは仕事部屋のドアを閉めて、たった独りになったとき現れてくる秘密の面」と語っている。¹⁰⁾ そうすると、大人向けの短編を書いているダールだけを見て彼の評価を下すのは片手落ちであろう。案外、子供向けの童話を書いているダールの方に本当の彼の姿があるのかもしれない。

注

- 1) *New York Times*, November 8, 1953.
- 2) Kelly, James. 'With Waves of Tension,' in *The New York Times Book Review*, November 8, 1953, p. 5.
- 3) Dahl, Roald. *The Collected Short Stories of Roald Dahl*, Penguin Books, 1992, p. 724.
- 4) Ibid., p. 728.
- 5) Warren, Alan. *Roald Dahl*, The Borgo Press, 1994, p. 111.
- 6) Dahl, Roald. *The Wonderful Story of Henry Sugar*, Penguin Books, 1982, p. 220.
- 7) Treglown, Jeremy. *Roald Dahl (A Biography)*, faber and faber, 1994, p. 8.
- 8) West, Mark I. *Roald Dahl*, Twayne Publishers, 1992, p. 130.
- 9) Powling, Chris. *Roald Dahl (A Biography)*, Puffin Books, 1983, p. 65.
- 10) Dahl, Roald. *The Wonderful Story of Henry Sugar*, pp. 212-3.